

今ではなく
未来を見ることが大切だ



足立新田〈東京〉
有馬 信夫 監督
城東時代の1999年に東東京都立初の甲子園出場

城東指揮官時代の1999年に、東東京都立初の甲子園出場を成し遂げた有馬信夫監督(現足立新田監督)。あれから27年、大舞台で指揮を執った都立指揮官が、甲子園を振り返り、いまの球児、指導者にメッセージを送る。

城東の選手たちを
成長させる責任

—城東で監督になるまでは？
「鮫洲工定時制(閉校)で軟式を7年間指導していた。高校野球(硬式)の指導がなかったため、当時の甲子園を全試合ビデオ録画して、暇さえあればスコアを書きながらずっと観ていた。池田の篤文也監督、PL学園の中村順司監督など名将と言われた指揮官たちの戦いを観て、高校野球の魅力をあらためて知った気がする」

—城東で初めて野球部の監督を任された。
「1992年秋に初めて監督になって、最初の“夏”となった1993年の東東京大会準々決勝で、関東一と対戦した。小倉全由監督(現U18日本代表監督)が指揮するチームで、選手には米澤貴光さん(現関東一監督)がいた。うちのチームに力があり手応えがあったが、結果は0対13。城東初のベスト8だったが、甲子園はまだ遠いと感じた」

—監督2年目(1994年)のシーズンは？
「新チームの人数は14人だけになってしまった。力が劣っていたので同じ練習はできないと感じていた。選手たちに『どうなりたいか』を問うと、『先輩たちと同じ練習をして勝ちたい』という答えが返ってきた。同じ熱量で練習をし、選手たちは心技体で大きく成長した。夏は1回戦で豊南に接戦で負けたが、その時のチームの頑張りや城東の土台をつくったと考えている」

—1995年から1999年の甲子園出場までの期間は？
「1993、1994年の戦いを見た中学生たちが城東に興味を持ってくれた。また中学の先生たちが、城東を勧めてくれるようになった。城東を選んでくれた選手たちを成長させることが自分の責任だと感じた。みんな夜遅くまで練習をし

たが、選手たちは弱音を吐かず食らいついてきてくれた。1995年は5回戦で修徳に延長敗戦。1998年は4回戦で二松学舎大附に惜敗したが、強豪との差は縮まっていると感じた」

選手と保護者の情熱が
甲子園を導いた

—1999年の戦力は？
「キャッチャー福永泰也がチームの中心となって引っ張っていった。エースだった池村隆広は前年夏にアンダースローに転向させた。当初は3番手だったが、秋に好投し夏のエースとなった。120キロ前後のストレートだったが、リリースが極端に遅く、緩急を活かしたピッチングに対して打者はみんな詰まっていた」

—1999年夏の戦いは？
「春5回戦進出でシードとして夏に挑んだ。3回戦からの戦いで、4回戦以降はエース池村がすべて投げ切った。準決勝では優勝候補・早稲田実と戦い、初回に4点を奪って優位に立ったが、中盤までに同点に追いつかれる嫌な流れとなった。終盤に的野真也選手がホームランを打って勝ち切ったのを覚えている。イケイケのムード？ うちが初戦(3回戦)からイケイケだったよ」

—決勝戦の相手は駒高大だった。
「駒高大は春に選抜出場したチームで、優勝候補だった。だけど、うちは春大会で甲子園帰りの駒高大に勝って選手には自信があった。初回に1点を先制して7回まで1対0で進んだ。8回に満塁のチャンスからサードへの当たりが大きく弾んで2点を追加。エース池村が完封して3対0で勝った」

—東東京都立初の甲子園出場だった。
「運などいろいろな巡り合わせがあり甲子園に行くことができた。当時は必死だったので喜びを噛み締めることはなかったが、いま振り返ると選手たちは頑張ってくれたと思う。レギュラー、控えに関係なく、一体感を持ったチームだった。また保護者も勝ちたい気持ちが強く、(自分を)信じてついてきてくれた。選手、保護者、学校全体の結束でつかんだ甲子園だと思う」

—27年前の甲子園出場を振り返って？
「野球の技術はいまの選手の方が上手いと思うし、練習方法や食事などの情報も多い。大事なのは野球への情熱と必死さ。本気で勝ちたいと思っている選手がどれだけのいるか。指導者に言われてスイッチを入れるのではなく、自分たちでスイッチを入れて、限界まで行動していく力が求められている」

—アンダースローピッチャーをつくれれば勝てるか？
「右アンダースローの池村のようなピッチャーがいればいまでも十分に戦えると思う。でも甲子園出場以降、アンダースローを育てようとしたが大成しなかった。上手投げよりも身体の負担が大きいため、音を立ててしまう生徒が多かった。池村は3番手投手だったから『エースになりたい』『勝ちたい』という気持ちが強かった。全員の意識が高かったチームの中で、負けずに努力できたことが一番の強さだった」

—指導者に求められる能力とは？
「監督がどれだけ先を読めるかがすべてだと思う。その力には2種類があって、一つはゲームを読む能力。そのゲームが終盤にどうなるかを想像して采配していく必要がある。もう一つは、選手の成長を見極める能力だ。指導者は入学した選手の2年半後をイメージして、指導していかなければいけない。3年生の夏を見越して指導すれば、1度のミスなど問題ない。各選手のイメージがパズルのように組み合ったときに、結果が出ると考えている。自分自身も監督としては未熟で、1999年以来結果を残すことができていない。いまは足立新田の生徒たちと一緒に戦っているが、甲子園はあきらめていない。指導者自身が本気にならなければいけないと思っている」

PROFILE

有馬信夫(ありまのぶお)
1961年東京都生まれ。調布北-日体大。大学卒業後、鮫洲工定時制(閉校)で軟式を7年間指導。城東では1999年夏に東東京都立初の甲子園出場。保谷、総合工科で指導し2018年4月から足立新田へ。甲子園を知る数少ない都立闘将。



2026年3月号
掲載予定

【東京】
球春到来
注目チームレポート
選抜選考結果

月刊高校野球 CHARGE!

ご希望の方は、お近くのASA(朝日新聞販売店)までお問い合わせください

公式WEBサイト
http://monthly-charge.com

無料配布設置店

ベースボールショップ ベースマン立川店
東京都立川市柴崎町3-10-21 ワイ・アルビル 1F
TEL.042-512-8923

保険クリニック イオンフードスタイル小平店
東京都小平市小川東町2-12-1
TEL.0120-71-0088

店舗で無料配布の設置を希望される場合は、
編集室(042-521-7631)まで
お問い合わせください。

編集後記

足立新田の有馬信夫監督は、城東指揮官時代の1999年に東東京都立初の甲子園出場を果たしたキャリアを持つ。あれから27年、時代は大きく変わった。昨今のAIの出現によって「思考」がゆるぎ始めている。有馬監督は「AIに聞けばテストの答えはもちろん、野球の戦術も教えてくれる時代だが、じっと考えたり悩んだりすることも大切だ」と語る。城東時代は、選手が甲子園という目標に向かって、もがき、悩み、努力し続けたことで“扉”が開いたという。ベテラン指揮官は選手の力を信じ、いまま本気で甲子園を狙っている。(伊藤寿彦)

CHARGE! から待望の書籍が刊行!

全員野球、創意工夫、自主自律

東京都立のグラウンドには、高校野球の原点がある
限られた環境・時間で「都立の星」を目指す
高校野球・東京都立のチャレンジ
2026年2月27日(金)発売

都立の挑戦
最難関へ進む100年以上の高校野球。いかにして東京を代表する強豪校になるのか。その挑戦をCHARGE!が追いかける。全国の公立高校で活躍する選手たちの姿が、都立の星が再び輝く日は来るのか

掲載校 国立/城東/雪谷/小山台/文京/江戸川/日野/他全224ページ
販売予定価格 1,870円(税込)
ご購入は月刊高校野球CHARGE!公式ホームページから!
月刊高校野球CHARGE! 検索
または https://monthly-charge.com/

本誌掲載の写真をお買い求めいただけます。詳しくは下記をご覧ください。

- 下記のホームページにアクセスしていただくと、トップページが表示されます。
月刊高校野球CHARGE! 検索
または http://monthly-charge.com/
- 下記トップページ上段の【写真販売】または【写真販売】アイコンをクリックいただくと「イベントフォトSTORE」のトップページが表示されます。
写真販売
- 以下の「マイページID」と「アクセスコード」を入力してください。
マイページID charge
アクセスコード 2018100
- ログインをクリックしてください。「CHARGE!」発行号別にフォルダが出てきますので、ご購入を希望する発行号のフォルダを選択ください。お写真を確認することができます。
- ご購入したい写真を選択いただき、カートへ入れて、ご注文情報を入力からご注文が行えます。一部販売を行っていない写真もございます。予めご了承ください。

写真販売はイベントフォトSTOREに委託しております。詳しいご利用方法等は「イベントフォトSTORE」ホームページをご覧ください。http://ephoto.jp/